

平成 27 年度厚生労働科学研究費補助金

政策科学総合研究事業（政策科学推進研究事業）

国際生活機能分類児童版（ICF-CY）の妥当性に関する研究

（H26 - 政策 - 一般 - 002）

総括研究報告書

主任研究者 橋本 圭司 国立成育医療研究センター
発達評価センター長、リハビリテーション科医長

（研究要旨）

ICF; International Classification of Functioning, Disability and Health は生活機能という包括的な枠組みで「身体的、精神的、社会的安定」全体を捉えるものであり ICD と ICF の両者を活用することが「病を診る」のみならず「人を癒す」ことの実現につながる。

本研究の目的は、ICF の成り立ち及びの概要についてレビューするとともに、国際的動向を明らかにし、小児（障害を有する児を含む）等を対象に今後期待される ICF 活用の可能性について考察することである。

近年、成育医療における成果の指標として小児の社会参加や生活活動の評価の必要性が求められており、国際生活機能分類児童版（ICF-CY）の構造における「活動」と「参加」に基づいたその両方の指標となるような簡易的評価尺度の開発が望まれる。そこで、本研究では誰もが簡便に評価できる小児の活動・社会参加評価尺度 Ability for basic physical activity scale for children（ABPS-C）、小児言語コミュニケーション評価スケール ABLS-C（Ability for Basic Language and communication Scale for Children）を作成した。

ABPS-C は主に児童や幼児を対象に運動能力、活動度や社会参加状況を簡便に評価するための現在試案中の評価スケールである。ABPS-C は、基本動作、セルフケア、活動性、学校生活、余暇活動の項目から構成され、それぞれ国際生活機能分類児童版（ICF-CY）の d450（歩行）、d230（日課の遂行）、d455（移動）、d820（学校教育）、d920（レクリエーションとレジャー）と概念的、内容的に合致するものと想定される。

昨年度までは、ABPS-C 学童期版及び ABLS-C の妥当性と信頼性の検証を行ってきた。妥当性の検証では、日常活動度の評価の一つである ECOG（米国腫瘍学団体の一つ）が定めた Performance Status : PS と Lansky Performance Status : LPS、日常生活動作能力全般の評価である the Functional Independence Measure

for Children (WeeFIM)、小児の社会参加の指標となる Child and Adolescent Scale of Participation : CASP の結果と ABPS-C との相関関係を調査した結果、ABPS-C 総得点、下位項目共に、いずれの評価とも有意な相関を認めた。また、全症例の ABLIS-C スコアの平均は 10.29 点、知的発達の遅れがある群 (N=19) では 9.11 点、知的発達の遅れがない群 (N=16) では 11.69 点、自閉症スペクトラム児では (N=5) 8.8 点であった。言語的問題が明らかである群では (LS70 以下と定義) 新版 K 式の言語領域スコアと ABLIS-C の総スコアは有意に低かった。

本年度は、英国マンチェスターで開催された WHO-FIC 年次会議において、ABPS-C と新版 K 式発達検査との関連を検討した結果をポスター発表した。

今後、日常生活活動度に影響を与える要因の検討に加え、ABPS-C、ABLIS-C を用いた評価を国際間比較することで ICF-CY の活用促進の一助としたい。

1. 小児（障害を有する児を含む。）等を対象とした生活機能等に関わる
包括的評価に関する研究（安保 雅博）

研究要旨 ICF;国際生活機能分類の概要や国際的動向を明らかにし、小児(障害を有する児を含む)等を対象に今後期待される ICF 活用の可能性について考察する。

2. 整形外科疾患に対する長期入院児の就学判断に関する ICF-CY の妥当性
（内川 伸一）

【研究背景と目的】国際生活機能分類児童版（ICF-CY）はWHOで1980年に制定された国際障害分類（ICIDH）の改訂版で、2006年にこども向けのICFとしてICF-CYが制定された。障害を有する患児の状態を評価する際、従来のICIDH（以下、従来法）の考え方では、機能障害は社会的不利であり、社会的不利は障害が原因と一元的に判断されてしまう危険性があったが、ICFではその点が改良され、「機能障害」だけでなく「活動」「参加」の状態を評価し、さらに「環境因子」「個人因子」の影響を考慮することで多角的評価が可能となり、より実際の状態を目標設定や状況判断に反映させることができる。昨年度の研究報告では、就学復帰時期における従来法による基本動作評価（以下、基本動作評価）とAbility for basic physical scale for children（以下、ABPS-C）スコアを比較した。ABPS-Cは主に児童や幼児を対象に運動能力、活動度や社会参加状況を簡便に評価するための評価スケール（試案中）である。本年度は、普通学級、養護学校または院内学級への就学時の状況をそれぞれICF-CYを用いて従来の基本動作評価と比較することでその有用性を検討することを研究目的とした。

【方法】2014年~2016年2月にかけて整形外科疾患により当院で1ヶ月以上の入院加療を行った児のうち、退院後地域の学校へ復学した10例、養護学校へ復学した10例、院内学級へ一時就学した10例を研究対象とした。まずは普通学級や養護学校へ復学した児の退院時と復学時の基本動作評価とABPS-Cスコアを比較した。基本動作評価はABPS-Cの基本動作項目のスコアで評価した。一方、ICF-CY評価としてはABPS-Cの基本動作に加えセルフケア、活動性、学校生活、余暇活動の5項目で評価した。また院内学級に一時就学した10例の入院後2週の段階で症例別にABPS-Cにて評価し疾患別の就学状況を評価した。

【結果・考察】普通学級への復学児では退院時の基本動作評価でgrade3に達し

ていたが、退院後すぐに復学できていた児は10例中3例であった。すなわち基本動作評価の結果と実際の復帰とに乖離が生じており、これは普通学級への復学に際して、歩行可能な身体状況でも実際の就学を障害する因子が存在していた可能性を示唆している。一方、ABPS-Cを用いた評価では退院時に平均1.8点であり、その時点ではまだ復学できない状況の評価できていた可能性がある。さらに復学時の評価では平均2.5点と退院時のABPS-Cスコアから変動しており、基本動作評価より実際の就学状況判断としてABPS-Cが有用であった可能性が示唆された。また養護学校への復学児は普通学級と比べ、基本動作評価およびABPS-Cで低いスコアの段階で就学再開されていた。これは就学環境の整備されている環境では就学復帰が障害なく行われていたためと思われた。またこのように、既に環境整備が実施されている状況においてはABPS-Cでも基本動作評価でも就学再開の的確な判断が可能であった。一方、院内学級への就学児は、さらに低いスコアでの就学再開が行われていた。また同様に基本動作評価とABPS-C評価で同等な評価が可能であった。

これらの結果から、普通学級に復学した児に対しては、ABPS-Cの有用性が示唆され、既に環境が整備された学級への復学時は基本動作評価のみでも的確な判断が可能であった。すなわち、現時点では普通学級への復学環境の体制が不十分であり、また基本動作評価ではその判断が的確にできない可能性がある、また同様に就学環境の整備によってその問題が解決されうると考えられた。また院内学級では、基本動作評価 grade0 の児の就学を可能としていた。この児は基本動作評価以外においては普通の児であり、就学にあたり個人因子を評価された例と言える。言い換えれば、制度や体制を利用することによって社会参加を実現した例であり、社会が多種多様になる中で、環境因子や個人因子を考慮したICF-CYによる評価が今後ますます必要となる可能性が示唆された。

【結論】整形外科長期入院患児の就学時期の判断にICF-CYを用いた多角的・包括的判断が有用である可能性が示唆された。また同時に患児を取り巻く就学制度や体制作りが重要であると考えられた。

3 .ICF-CY に基づいた小児の活動・社会参加評価尺度に関する研究(上出 杏里)

研究要旨 成育医療における医療支援の充実化を図るためには、国際生活機能分類児童版(ICF-CY)の構造の核となる「心身機能・身体構造」の治療成果だけでなく、「活動と参加」の質が問われ、「活動と参加」の指標となる簡易的評価尺度の必要性は高い。そこで、本研究では、日常における小児の活動・社

会参加状況を誰もが簡便に評価できる尺度の開発を目的に、学童期における小中学生を対象として、ICF-CY に基づく 5 項目（基本動作、セルフケア、活動性、教育、余暇活動）を 4 段階で評価する Ability for basic physical activity scale for children (ABPS-C) を作成し、妥当性、信頼性について検討した。妥当性の検証では、日常活動度の評価の一つである ECOG（米国腫瘍学団体の一つ）が定めた Performance Status : PS と Lansky Performance Status : LPS、日常生活動作能力全般の評価である the Functional Independence Measure for Children (WeeFIM)、小児の社会参加の指標となる Child and Adolescent Scale of Participation : CASP の結果と ABPS-C との相関関係を調査した結果、ABPS-C 総得点、下位項目共に、いずれの評価とも有意な相関を認めた。また、信頼性の検証においても、ABPS-C 下位項目の全てで高い相関を示した。以上より、ABPS-C 学童期版は、小児の活動・社会参加を評価する簡易的スケールとして有用であることが示唆された。学童期児童の身体活動状況と社会参加状況の概要を把握することで、身体面や生活環境、生活支援者など、どの側面から支援が必要であるのかを検討し、児や家族らの QOL 向上および成育医療の質の改善にむけた活用が期待される。

4 .ICF 評価点における有用性の検討 ～ ICF コアセットを用いて～（山田 深）

研究要旨 脳卒中急性期患者を対象として ICF コアセットを用い、ICF 評価点および ICF コアセットの利便性、ICF のスタッフ間の情報共有ツールとしての有用性を検討した。初発脳卒中患者 56 名において入院時に実行状況と個人の能力に有意差のあったカテゴリーは d420 移乗、および d540 更衣であった。入退院時の評価点については d455 移動、d465 用具を用いての移動などを除き、有意差を認めた。ICF コアセットを用いて比較検討が可能なデータを取得するとともに、ICF 評価点によりケアの前後での変化を捉えることができた。ICF-CY の普及を図る上では ICF コアセットのような病態、疾患に合わせたカテゴリーの組み合わせが必要となると考えられる